

## 現場の課題に即応した小学校教員養成ワークショップ

児童教育学科 狩野克彦・木村 寛・松浦光和・佐藤幸也・豊澤弘伸

### I 背景と目的

今日の学校現場は、様々な課題を抱え、教員はその対応に追われている。このような現場の課題に対して、教員養成校（課程）でも各種の答申や提言に基づき、カリキュラムの改訂や教育内容の見直しなどを行っているが、課題によってはそのような対処ではまかなえないものも出てくる。

そもそも、学校教育に関わる問題は、その取り扱いにおいて、子どもと学校組織に焦点があてられ、教員自体に目が向けられていないことが少なくない。不祥事などを除けば、教員に関わる問題は、性質上も表に出にくく、大学における教育内容の対象になるまでに時間を要している。また、従来の研究領域に対応しない事象もあり、カリキュラムの範疇に入りにくく、扱われなまま学生たちが養成課程を修了することもありうるのである。その結果、学校現場に赴いてから、問題の対処に苦悩している事実が数多く報道されている。

教員養成系の学生の就職状況は、地域によっては一時期よりは好転したとはいえ、東北地区についてみれば、相変わらず厳しい状況が続いている。そのため、全国的な視野に立っての就職活動が求められることになるが、これまでの就業・就職観では難しい面もある。このため、ある意味での意識改革が必要となるが、現行の養成カリキュラムの中では展開しにくいところである。また、地元を離れての就職ということにな

れば、前述の教員個々に関わる問題の増加も予想される。

このような状況を踏まえ、それに対処すべく、本研究では2つの課題を関連させて、ワークショップを実施し、その検証を行うこととした。

既に児童教育学科では、類似する課題に対応するために、カリキュラムレベルではなく、課題に直結したワークショップによる展開が有効であると考え、いくつかの取り組みを展開させてきた。パイロット段階ではあったが、成果を確認できるものであり、今回は、その取り組みをベースにしてシステム化し、規模を拡大して実施し、その効果を検証することを目的とする。

展開するワークショップは、就業意識と就職機会の拡充と就職活動および就業継続のための心のケアを目的とするものにするが、今回は主に前者についてはシステムの構築を、後者についてはワークショップの効果を検証の対象として研究を進めた。

### II. 実施内容

まず、今回対象にしたワークショップについて概観する。2つのワークショップは以下の通りである。

- A. 関東地区の教育実践を理解するためのフィールドワーク—小学校および教育関係施設への体験実習
- B. 教員の心のケアのためのワークショップ—エンカウンター・グループの

## 形成

ワークショップAは、関東地区（東京・神奈川・埼玉・千葉の四都県）の小学校教育事情をフィールドワークによって理解する取り組みである。教職に対する視野の拡張と就業意識の向上を目的に5つの小学校と1つの事業所（教科書会社）、1つの研究所において、体験実習を含む視察と研修を行い、30名を超える学生が参加した。内容は、小学校では資料や現場の教員の話から、各地区の教育事情や個々の授業実践を理解するとともに、実際に教室実践に参加し、子どもたちとの交流を行った後、学区を実踏した。その後のカンファレンスで、各地区の様子について報告を行い、情報の共有を図った。翌日は、教科書編集の現場に赴き、その仕組みについて把握した。次いで、教育調査研究所で現在の教育の諸問題について講話を受けるとともに本ワークショップの成果検証を行い、今後の学習計画への示唆を獲得するというものである。

ワークショップBは、エンカウンター・グループ（以下、EGと略）によって心のケアのためのスキルを獲得する取り組みである。夏と春の休業期間を利用し、合宿形式で行った。このうち、夏の部は、自己生成を目的としながらカウンセリングの基本についても学び、2回目はカウンセリング技術の向上をねらい、より実践的にワークショップを展開させるというもので、毎週学内で実施している学内でのEGをもとに行なった。

以下では、それぞれについて、具体的に報告と検証を行う。

### 【ワークショップA：関東地区の教育実践

を理解するためのフィールドワーク—小学校および教育関係施設への体験実習】

#### (1) ワークショップの内容

ワークショップAは、未知の地域において、フィールドワークの手法を用いて、教育事情を確認し、自らの教職に対する視野の拡張と就業意識の向上を図ることを目的とする取り組みである。今回は、東京・神奈川・埼玉・千葉の四つの都県を対象に小学校事情の調査を行った。

ワークショップは段階的に次のように行った。

##### ①関東地区の教員採用情報の把握

実習終了後、教採関連雑誌や本学教職関係資料、各教育委員会のWeb等から、関東地区の教員採用に関わる情報を収集し、それぞれの状況について概観した。

##### ②4年生の教採体験報告会

本年度、教採を受けた4年生から、それぞれの教採対策について体験報告をしてもらい、各自が収集した情報について補強したり、確認したりした。

##### ③関東地区教採説明会への参加

各教育委員会が実施する教員採用に関わる説明会へ参加し、情報の収集と理解、就職先の選定と就職意欲の涵養を図った。

##### ④地区別教採相談会への参加

学科主催で行った地区別の教採相談会へ参加し、理解を深めた。この会は、教採体験報告会の第二弾で、地区ごとに分かれて、合格した4年生に具体的に相談することを目的に実施した。

##### ⑤フィールドワーク先の選定と調査

以上の作業をもとにして、具体的にフィールドワークの場所を選定する作業で

ある。今年度は、東京都・神奈川県(川崎市)・千葉県・埼玉県への希望があり、これらの地区の5地域・小学校を対象として実施することとした。希望地ごとにグループを作り、訪問先の小学校および学区地区の状況について、資料をもとに事前調査を行った。調査は担当教員の指導の下、進められた。

#### ⑥小学校の視察(体験実習を含む)

各学校でのフィールドワークは、次のように進められた。

まずは、校長から当該校の様子について説明があり、各地区の教育事情についての説明を受けた。次に、県(市)の教育施策についての解説があり、事前の調査での疑問点について質問し、解説を得た。

次に、当該校の教育実践について具体的に説明をもらった後、各教室を回り個々の授業実践を参観した。場合によっては、実際に教室実践に参加し、子どもたちとの交流も行った。

#### ⑦学区の実踏調査

学校視察の後は、学区と隣接する地域についてフィールドワークを行った。実際に住宅地や商業地等を歩いて生活環境を確認し、校長の説明を目と足で確認、地域への理解を深めた。教育環境の確認をするとともに、将来的に赴任した場合の住環境を確認することでもある。

#### ⑧カンファレンス

フィールドワーク終了後、各グループがそれぞれの地区について、全体の研修会場で報告を行うもので、情報の共有と同地区の視野に入れる学生同士の交流を図った。

#### ⑨教科書編集の見学

出版社に出かけ、教科書編集の現場に入り、その仕組みについて理解した。

#### ⑩教育調査研究所でのワークショップ

現在の教育に関わる諸問題について講話をもとに理解を進めるとともに、今回のフィールドワークでの収穫と教育実習(2010年10~11月実施)の成果を評価・確認する演習を行い、今後の学習計画への示唆を得るというものである。

### (2) 考察

今回は、その規模を大幅に拡張したが、前回の反省点を踏まえ研修内容をプラン化して提示することで、受け入れを含めて、円滑に実施することが出来た。システム的に確立してきたものと判断できる。

いくつか問題になったことについて指摘しておく。

まず、フィールドワーク先の選定についてであるが、なるべく多くの場所での実施が望ましいとはいえ、担当教員や引き受け校の確保の点で難しいところがある。今回は、同一時期での実施としたため、各学校との日程調整などが最大の課題となった。昨年度は、2カ所ということもあり、プログラム内容も各校の事情に合わせて設定できたが、今回は、全体での進行との関係で、同様のプログラムを設定したため、各校との調整に時間が必要になった。ただし、受け入れ側にはプログラムの提示があったため、受け入れの可否そのものの判断は短時間ででき、その後の調整も順調に進んだ。このため、受け入れの候補校の確保が課題となろう。また、一回の実施のため、希望していながら参加がかなわない学生が出た

ことも、一回のみ開催とあわせて検討すべき問題である。複数回の実施によって解決できる可能性もある。

実施時期に絡む問題としては、各校の行事および時間の調整、この期特有の問題として、インフルエンザやノロウイルスなどの疾患の流行による学級閉鎖などへの対応も課題となった。

このように、いくつかの課題はあるが、前年度に引き続き、学生の教職に対する教養の深化・拡張と、就職・就業意識の改革には大きく寄与していると評価できる。具体的には、震災による出願行動の遅れが心配されたが、このワークショップである程度方向性を導き出していたため、混乱もなく進めることができていると判断されるからである。

今後は、卒業後、赴任していった者を含めて、この取り組みの効果について、具体的に検証する必要があると考えている。

【ワークショップB：教員の心のケアのためのワークショップーエンカウンター・グループの形成】

#### (1) ワークショップの内容

ワークショップBは、EGによるカウンセリングマインドの涵養を目的とする取り組みである。学科では、現場が抱える課題として、児童のみならず教員をも含めての学校における心のケアの必要性を取り上げ、小規模ながらこれまでもこのワークショップを実施してきた。今回はそれを拡張するもので、本学教員に加え、学外からファシリテーターを招き、2010年8月と2011年3月の2回、13人の学生が参加して3泊4日の合宿で行った。EGのスケジュールは

Table 1 に示した通りで、各セッションは概ね3時間であった。

Table 1 EGのスケジュール

時	1日目	2日目	3日目	4日目
7～9		起床・洗面・食事	起床・洗面・食事	起床・洗面・食事
9～12	集合	第3セッション	第6セッション	第9セッション
12～14	お昼休憩	昼食・休憩	昼食・休憩	昼食・解散
14～17	第1セッション	第4セッション	第7セッション	
17～19	食事・自由時間	食事・自由時間	食事・自由時間	
19～22	第2セッション	第5セッション	第8セッション	
22～	就寝	就寝	就寝	

#### (2) 評価の方法

1日目のEG開始前、2日目の最終セッション終了時、4日目のセッション終了時に参加メンバーに対し「エンカウンター・グループ効果測定尺度」へ回答させた。この尺度の下位尺度は、①「自己存在感」、②「他者内面の理解」、③「自己一致」、④「他者受容」、⑤「自己信頼」である。以下に概説する。

①「自己存在感」は、「今の自分のままで生きたいと思う」「自分の性格が好きだ」「自分の生き方が好きだ」「今の自分を大きく変えたいとは思わない」「自分の人生は素晴らしいと思う」「今の自分を大切にしたい」「自分の考え方が好きだ」の7項目からなる。自分のあり方に対する肯定感を示す。

②「他者内面の理解」は、「人の内面をそのまま理解したい」「人がうまく表現できない気持ちを理解したいと思う」「人が抱えている問題を真剣に考えることがある」「問題を持っている人を、暖かく見守りたい」「人の持つ内面のもろさを、暖かく見守ることが出来る」「人の立場に立って考えようとする」の6項目からなる。うまく表現できない気持ちを内面に抱える他者に対する積極

的で暖かい気持ちが主な内容である。

③「自己一致」は、「どんな事にも自分らしく取り組んでみたい」「自分らしく生きたい」「私の内面に感じられたものを大切にしたい」「ありのままの自分でいたい」「私が持っている感じや感覚を大事にしたい」の5項目からなる。ありのまま存在したいという姿勢と、ありのままにいるためには難しいことにでも背を向けないという内容である。

④「他者受容」は「自分とは考え方が違う人でも、親しくできる」「自分とは生き方が異なる人でも、受け入れることはできる」「自分とは考え方が違う人に対しても、素直に耳を傾けることができる」「人の考え方を受け入れることができる」「自分とは考え方が違う人でも、大切にしたい」の5項目からなる。自分とは考え方や生き方が異なる者に対する受容的な態度である。

⑤「自己信頼」は、「どのような事でも切りぬけることができると思う」「どんな困難にぶつかっても、克服できると思う」「私はいろいろなことをうまくこなすことができると思う」「社会のいろいろな状況でうまくやっていく自信がある」の4項目からなる。自分に対する信頼を示す。

次に、下位尺度得点の処理については、回答を項目ごとに得点化した。その際、肯定的な反応、積極的な回答を高得点とした。例えば「今の自分のままで生きたいと思う」では、「当てはまる」を5点、「少し当てはまる」を4点、「どちらとも言えない」を3点、「ほとんど当てはまらない」を2点、「全く当てはまらない」を1点とした。さらに、尺度ごとに項目の得点を合計して下位尺度

得点を求めた。従って、7項目からなる「自己存在感」は最高得点が35点、最低得点は7点、6項目からなる「他者内面の理解」は最高得点が30点、最低得点が6点、5項目からなる「自己一致」「他者受容」は最高得点が25点、最低得点が5点、4項目からなる「自己信頼」は、最高得点が20点、最低得点が4点となる。

### (3) 評価の結果

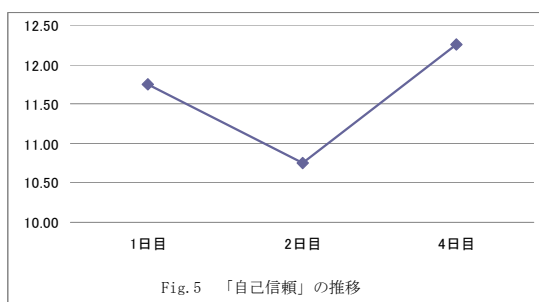
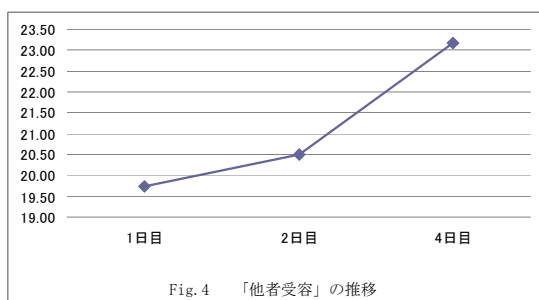
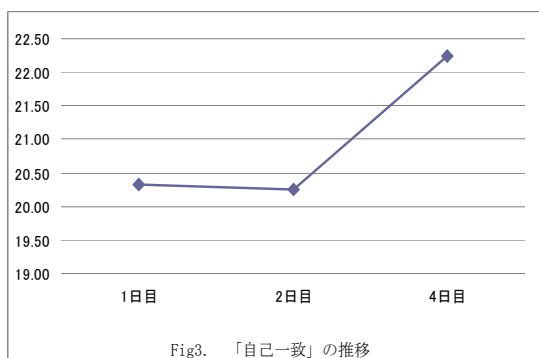
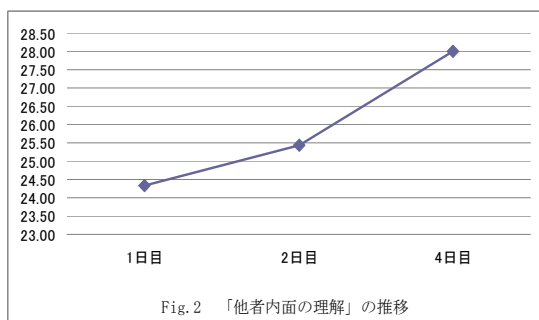
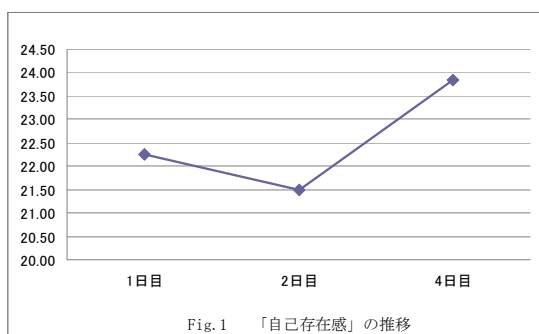
各下位尺度得点と比較した。各下位尺度の得点と標準偏差は Table2 に示した通りである。また、平均得点の変化はグラフ化し、Fig.1 から Fig.5 に示した。

さらに、各下位尺度について、1日目と2日目、2日目と4日目、1日目と4日目の間で対応のある t 検定を実施した。その結果は Table3 に示した。

Table2 および Fig.1~5 からは、「自己存在感」、「自己一致」、「自己信頼」など自己

Table 2 下位尺度の平均値と標準偏差

下位尺度	測定時期	度数	平均値	標準偏差
自己存在感	1日目	13	21.77	4.66
	2日目	13	21.92	5.56
	4日目	13	24.15	3.98
他者内面の理解	1日目	13	23.00	6.01
	2日目	13	25.38	2.93
	4日目	13	27.92	2.06
自己一致	1日目	13	19.15	5.79
	2日目	13	20.31	3.57
	4日目	13	22.38	2.63
他者受容	1日目	13	18.62	4.99
	2日目	13	20.62	2.22
	4日目	13	23.15	1.72
自己信頼	1日目	13	11.38	2.90
	2日目	13	11.15	3.48
	4日目	13	12.62	2.96



についての概念は 2 日目に一旦下降して 4 日目に上昇するが、「他者内面の理解」、「他者受容」など他者についての概念は連続的に上昇する。

Table 3 各比較の結果(t 値)

下位尺度	1 日対 2 日	2 日対 4 日	1 日対 4 日
自己存在感	.13	2.37 *	2.06
他者内面の理解	1.57	4.52 ***	3.26 **
自己一致	.78	2.13	2.16
他者受容	1.48	4.19 ***	3.28 **
自己信頼	.21	1.73	1.33

\*\*\* P<.001 \*\* P<.01 \* P<.05

#### (4) 考察

今回の EG では、「他者内面の理解」、「他者受容」など他者に対する配慮についての下位尺度得点が増えやすく、「自己存在感」つまり自己への概念も上昇することが分かった。全ての下位尺度で有意なレベルでの下降はなかった。

カウンセリング・マインドとは抽象的な概念であるが、他者への配慮が含まれることは当然であろう。今回の結果は EG によって他者の内面の理解と他者の受容についての概念が増えることを示しており、教員としての資質向上に寄与する必要な経験であることを示唆している。

### III 総括

今回展開したワークショップについてはいずれも効果が確認され、課題に対する対応としての有効性が検証された。今後は、これらをいかにして通常のカリキュラムの中に組み入れていくかについて検討が必要となる。